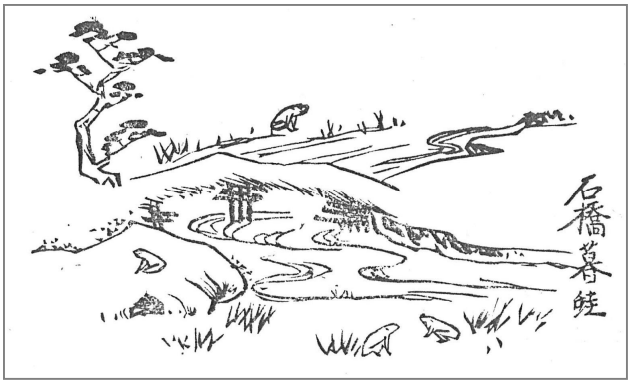
「柏崎の橋」

１３　石橋

西本町の広小路を南に下った先、新橋の広小路バス停付近には「石橋」と呼ばれる小さな橋があった。かつてこの場所には用水の鏡ケ沖から鵜川に注ぐ小さな流れがあり、「石橋」はこの小川に架かっていたという。

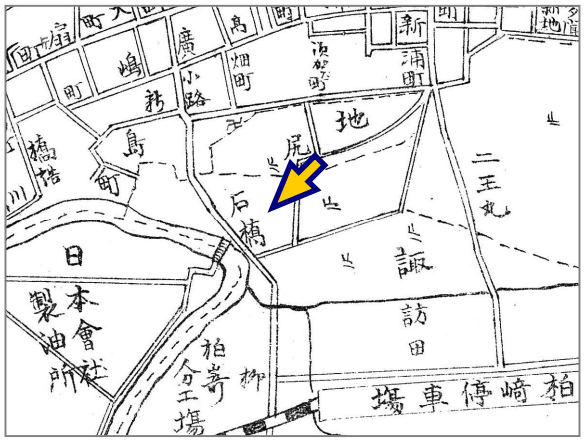
この名前は、付近に住んでいた「石橋藤太」の苗字に因んでいる。石橋氏とは、枇杷島村の庄屋関矢氏のことであり、「刈羽郡案内」は石橋藤太を「関矢家中興の祖」と記している。ちなみに往来改修の時、この橋を架け替え「姿見橋」と名前を変えたところ、近所の人から抗議がきて、もとの「石橋」という名に戻したという話も残る。

正徳５年（１７１５）に刊行され、柏崎の名所旧跡を俳句に詠んだ「小太郎（柏崎四十八題）」には、当時の石橋付近の風景と思しき挿絵が「石橋暮蛙」として掲載されている。「小太郎」にはかつて大変に賑わったという真光寺の夜市の様子も描かれているが、その真光寺は応永年間（１４００年ごろ）に石橋藤太らが建立したと伝わる。



石橋暮蛙
「小太郎（柏崎四十八題）」より

●参考にした本
こどものための柏崎物語（224 ササ）笹川芳三 著
柏崎（224 ナカ）中村葉月・西巻三四郎 編
柏崎文庫（080 セキ）関甲子次郎 著



地名としての「石橋」
「柏崎華街志」（明治４２年発行）より

真光寺の本尊は中浜の海底から引き上げられた観音像といわれ、「柏崎市伝説集」には次のような伝説が書かれている。

石橋藤太の子、漁に出たところ風のため行方が知れず、藤太夫婦は、この観音の霊夢により、一心に祈願したところ、件の子供は板片に乗って帰って来た。両親の喜び一方ならず、極楽寺の住僧とはかって、真光寺を建てて観音をまつった。

「石橋」は橋の名前だけではなく、枇杷島村の地名としても使われた。柏崎町と上条郷をつなぐ物流の動脈にあった石橋地区は、多くの人が薪や炭・野菜などを持って行き来した。しかしそれは昔のこと。越後タイムスの記事「今は昔　柏崎四十八題」によれば、掲載当時の昭和２４年にして「（石橋は）今は舗装道路となりて、そんな小ッぽけな橋は眼にも留まるまい。」とされている。最近では広小路と海岸線を結ぶ「新橋海岸線」が開通、石橋地区は、人にかわり、国道８号線から海岸へ多くの車が通行している。